

7年経ちました

先日、久しぶりに気仙沼へ行ってきました。東日本大震災直後は頻繁に行っていましたが、今回は3年ぶりくらいでしょうか。気仙沼には私の商工会議所青年部時代の友人（Sさんとしておきます）がいます。彼とのエピソードは拙著「エネルギーから経済を考える（P5～10あたり）<https://secure842.sakura.ne.jp/enekei.jp/newbook2017/>」に書きましたのでよかったですら読んでみてください。

クリーニング店を営んでいたSさんは、震災の日、奥様の手を引いて命からがら、高台にある気仙沼高校で逃げて無事でした。しかし、家と店と工場はすべて跡形もなく流されました。男気のある彼は、気仙沼高校に設けられた避難所のリーダーとして600人の面倒を見ていることを知ったのは、ようやく携帯電話がつながった地震から4日ほど経った後でした。無事を喜び合うも束の間、現地に食べるものがないと聞いた私は、早速にかまぼこを10トントラックに積んで現地へ送りました。その後、Sさんを基点にして、支援活動は続くこととなります。全てを流され、現地建て替えも用地の利用制限の関係でできないことが分かった時点で、彼はクリーニング業を諦め、震災の復興を自らのなりわいにすることを決意します。そして、(私も少しお手伝いをさせていただきましたが)「気仙沼復興株式会社」という会社を立ち上げ、現在に至っています。

7年経とうとする今、しばらくぶりに会った彼と思い出話になりました。つくづくと思ったことは顔の見える関係の大切さ。私がもしSさんを知らなければ、せいぜいできたことは、TVの前に座って赤十字に義援金を送ったり、市役所に支援物資を届けたりだったろう。お役に立てたかどうかは別として、いろいろ動けたのは、私が商工会議所青年部の全国の会長だったご縁でSさんを知っていたから。Sさんといわゆる顔の見える関係があったから。

そして、もうひとつ学んだことは、大規模な中央集権的な仕組みの限界と、小規模な独立分散型の仕組みの柔軟な有効性でした。Sさんにかまぼこを送り先を訊いた時、災害対策本部には送らないと言われてきました。物資が出てこなくなってしまうのでと言うのです。いわゆる中央集権的な仕組みは、平常時には効率よく動くのですが、想定外の事態に陥ると止まってしまう。そこでものをいうのは、Sさんと私のような小規模な独立型、分散型の仕組みであること。ですから、両方の仕組みが必要だということ。

このふたつのことは、我がふるさと小田原・箱根のまちづくりにも重要な視点だと思います。これからの会議所活動にも活かしてまいります。

7年経ち、犠牲になられた大勢の御霊に報いるため、あの時何が起こったのかを忘れずに、学んだことを活かしていかねばと、改めて思いました。

会頭 鈴木悌介